

『同志社百年史』の編纂から完成までの経緯

今 中 寛 司

同志社創立百周年記念事業の一環として、『同志社百年史』の編纂刊行のことが決定されたのは、一九七六年度である。上野直蔵総長の発案により、同志社の持つ稀に見る膨大な同志社関係史料を活用して、正確で公平で歴史的価値判断の正しい『同志社百年史』の計画が始められた。この計画では一九七七年度から一九七九年度の三カ年が予定され、百年史編纂室には社史史料編纂所が当てられ、いよいよ一九七七年度の初めから編纂作業が開始された。

一九七七年度

五月一日に上野直蔵総長が社史史料編纂所所長を兼任され、五月一日には河野仁昭文学部事務長が社史史料編纂所主任となり、これより先、五月一日には紫田潔、露口卓也・沖田行司（のち山田芳則と交替）（大学院文学研究科博士課程学生）の三名が社史史料編纂所非常勤嘱託職員となり、『同志社百年史』編纂の事務上の陣容は整った。次に『同志社百年史』を執筆し編纂するための組織作りは、六月一〇日の第一回編纂企画委員会で次のように決定された。上野総長が編纂委員長に当たられ、

執筆者全員を以て編纂委員会を構成することとし、さらに編纂企画委員会委員として、今中寛司（チーフ・文）・杉井六郎（人文研）・北垣宗治（文）・宮沢正典（女子大）・園部望（本部）・河野仁昭（社史）の六名が委嘱された。編纂企画委員会は上野編纂委員長に直属し、その諮問に答え、事業計画の素案作りや諸準備及びその実務等を担当する。そののちは毎月平均三回ほど編纂企画委員会が持たれ、上野総長同席のもとに計画が進められた。これと相前後して、社史史料編纂所の大量な収蔵資料の整理、及び教カ所に分散していた資料の収集が、河野主任を中心に精力的に進められた。一〇月一二日の編纂企画委員会では、『同志社百年史』の構成を、「通史編」と「資料編」にすること、「通史編」は同志社の歴史の百年を五期に分け、各部約一〇名の分担執筆者を依頼し、一九七九年の夏ころ出来を予定することとなった。

十一月二十九日の編纂企画委員会で、「通史編」の分担執筆者を決定し、「通史編」の執筆要領とともに原稿依頼状を上野総長名で分

担執筆者宛てに発送したのは、一二月中旬であった。

一月二六日には、編纂企画委員及び分担執筆者全員の会議が上野総長名で開催され、編纂企画委員及び分担執筆者全員が『同志社百年史』編纂委員に委嘱されると同時に編纂委員長には上野総長が当ることに決定された。この席上、先の編纂企画委員会で決定された通りの『同志社百年史』の基本構想について今中委員から説明があり、その内容及び執筆要領については杉井委員から詳細な説明がなされた。なお分担執筆していただいた原稿については、編纂企画委員会で行なう調整や体裁の整備についての諒解をお願いした。原稿一切を一九七八年九月末日とし、『同志社百年史』編纂の大事業はここにおいて始めて軌道に乗ったわけである。当日の出席者は分担執筆を依頼された三三名のうち二七名で、大変な盛会であった。

会場は有終館第一会議室で、このあと懇談会にうつり、非常に多くの建設的な意見や、また注意事項についても話し合われ、これらの諸見解は、その後の編纂事業を進めて行くうえで、まことに大きな励みにもなり支柱ともなった。

一九七八年度

一月一四日の編纂企画委員会で、先の編纂委員会の席上での有効な諸討議をふまえて、『同志社百年史』の諸項目について再検討した。その結果、執筆者数三五名となり、早速新しい執筆者には依頼状が追加発送された。

三月三十一日には『同志社社報』No.315に、『同志社百年史』の編纂刊行事業について(社史史料編集所)の記事が掲載され、ここで『同志社百年史』の全貌が明らかにされたわけである。この時点では、『通史編』が第一巻で、第二巻・第三巻は「資料編」に当て、

全三巻の計画であった。最終的には、『通史編』のページ数が増えたため、これを分けて第一巻・第二巻とし、「資料編」を第三巻・第四巻とすることとなる。『同志社百年史』通史編の編成は、全体を五部に分け、それぞれの部にいくつかの章を建てることとされた。第一部、明治前半期は一三章、第二部、明治後半期は一四章、第三部、大正期は一〇章、第四部、昭和前半期は一〇章、第五部、昭和後半期は一〇章である。この結果、五部、五七章建ての編成に一応落ちついたわけで、この五七章をそれぞれの執筆者に依頼したのであるが、一人の執筆者が複数の章を担当する場合もあり、総執筆者数三五名となった。

四月二〇日には、『同志社社史史料編集所文書分類表』(未定稿)が発行され、社史史料編集所の膨大な資料は、見事な分類方式と相俟って整理は完成した。これより社史史料編集所が行なう各執筆者への資料のコピー・サービスが行き届き、『同志社百年史』の内容が、正確に史料の裏付けを得ることになり、百年史の最大の特徴を決定つけることとなった。同時に同志社社史史料編集所の収蔵文書類は、内容が極めて豊富で、それ自身が同志社百年史の化身ともいえる。また今後の利用価値も絶大である。

『通史編』の原稿は一〇月ころから出はじめ、一二月には全体の約半分が出揃ったので、『通史編』を編成するうえでの大体の原則を立て、これに則して原稿段階における検討と朱入れを始めることとした。編纂企画委員は二月二七・二八日の両日合宿してこの作業を行なった。それと同時に原稿の督促も行なった。

一九七九年度

一月に『同志社百年史』の印刷は日本写真印刷株式会社に発注することが決定され、三月七日の編纂企画委員会で、完成原稿の通読及び小見出しを付ける作業を開始することが決った。同時に掲載写真の選定と撮影が並行して進められた。三月二〇日には『同志社年表』（未定稿）が社史史料編集所で完成し、同時に出版された。この年表は網羅的に詳細を極め、これを簡略化して『同志社百年史』四冊目の最後に「同志社年表」として収録されるが、この『同志社年表』は単独にそれ自身としても極めて利用価値の高いものである。これと相前後して通読を終った完成原稿は逐次日本写真印刷への送り込みが開始された。

「通史編」と並行して、杉井委員を中心に選定を進められていた「資料編」の原稿も、三月三〇日から日写への送り込みが始まった。

「通史編」の最後の項目である「現況と課題」は、「通史編」を通読したうえで、編纂企画委員六人で分担執筆する方針をとり、夏休期間はほとんど連日のように座談会を行ない、その速記録をもとに執筆された。その完成原稿をさらに編纂企画委員会で再検討して最終原稿とした。

「通史編」の初校が出はじめたのが四月三日からで、これより編纂企画委員の主たる仕事は校正事務となった。その分担担当者は、第一部（北垣）・第二部（今中）・第三部（宮沢）・第四部（宮沢）・第五部（北垣）で、全体の統一整備には杉井委員が当った。かくて夏期休暇期間には「通史編」の第三校の校正を編纂企画委員の手によって連日作業が進められ、九月以降、さらに大事をとって第四校の校正を行ない校了とした。

「資料編」の初校が出はじめたのは四月二八日からで、その校正には杉井委員と河野委員を中心に、社史史料編集所の所員が全精力を傾けてこれに専念し、この難事業を完遂した。さらに全巻末に付録される「同志社年表」の項目選定作業も、「資料編」校正事務と並行して行なわれ、その量が膨大であったため、これも『同志社百年史』編纂途上における難事業の一つであった。

九月三〇日の『同志社社報』No.331には、「同志社百年史、編纂事業―その進行状態と内容」が掲載され、「通史編」二巻、「資料編」二巻の最終的に決定された全内容が公表された。当初の「通史編」の章建ては『同志社社報』No.315の通りであったが、そのうち編纂委員の方からの意見もあり、これを一九七八年五月六日の編纂企画委員会で改訂した。第一部、創業と成育、第二部、キリスト教教育の受難、第三部、大学への道、第四部、戦時下の学府、第五部、再生と発展、がそれで、五部五五章建てとなった。

「資料編」は二項目から成り、同志社開業と新島在世中の資料や、同志社記事・総長報告等は、同志社の持つ貴重な文化財の一つとして収録された。また全同志社の諸学校記事や、学生運動を始め戦時下の学園及び現在の同志社の施設も含め、さらに校友会・同窓会にも及ぶ網羅的にかつ重点的な資料の選定は、同志社百年の歩みを史料的に確かめ得たものといえよう。

この拙文が活字になるころには『同志社百年史』全四冊が既に出版済みであろう。この大事業を終始精神的に物的に支えて下さった大黒柱はいうまでもなく上野総長である。編纂企画委員会の一員として感謝の気持で一ぱいである。

（大学文学部教授）

『同志社百年史』通史編

重久篤太郎

『同志社百年史』（通史編二巻）がいよいよ刊行されることになったので、その批判か感想を「同志社時報」に寄稿するようにという依頼を受けた時は、未だ校正中のことであって『百年史』編刊のあらましを聞いたただけであった。やがて浩瀚な通史編の校正刷をうけるとるに至って、これはえらいことを引きうけてしまったことと思つたが、後悔先に立たずであった。さらに執筆にあたつて与えられた期間の大半は旅行中であつたので、通史編を全章にわたつて精読するには至らなかつた。従つて以下述べるところは『百年史』の書評というよりは、その読後の感想を思ひつくまに記したものに過ぎない。

同志社社史は正史としてまとめたものには『同志社五十年史』（昭和五年）と『同志社九十年小史』（昭和四十年）とが刊行されたが、このたびの『同志社百年史』はその構成においても、その内容においても前の社史とは異なつた特質をもっている。『百年史』は企

画委員によつて編集の構想が建てられ、通史編は百年の同志社の歩みを五つの時代に分け、日本の近・現代の史的動向と照応させながら、かつプロテスタント・キリスト教ならびに学校教育史の中で、その間に同志社に生起し、あるいは同志社が直面した重要な課題あるいは出来事をとりあげ、それぞれの時代に、新島襄以来の同志社の教育理念が曲折を経ながらも、維持・展開し、あるいは、またいかに新しい息吹きをもつて再生されて来たかという、その辿つた歩みを直視して、百年史を叙述するという方針が定められ、主題の選択が行われた」（編集後記）。この編集方針はやや抽象的に述べられているが、執筆者によつて精粗の別はあるにしても、全体からみればその方針は貫かれているように思われる。

しかも、各章を分担した執筆者が三十余名に及んだことは、今までの正史編集においては類例のないことであり、その専門の分野に応じて学外にも執筆者を求めたことも画期的なことであり、それに

よって一段と忠実な解明がなされている。(なお、「京都看病婦学校」と同志社病院」の執筆者の長門谷洋治氏が大阪回生病院医師とあるのは、日生病院医師の誤りである)。

十余年前に刊行された『同志社九十年小史』の編纂当時には、すでに社史史料編集所があり、その編集にあたったのであるが、同志社社史の第一次資料は未だ整理中の段階であり、『九十年小史』には学内の資料は十分に活用されるまでは至らなかった。ところが、この『百年史』では執筆の参考に資するために、社内外の第一次資料がよく整理されて、しかも各章の執筆にあたってこの第一次資料が利用されているのは、本書の価値を高めるものであろう。また今までの正史にはほとんど取りあげられなかった『同志社裏面史』や『同志社ローマンス』といった外史も時には資料として援用されているようである。

同志社百年の歩みを通読した印象としては、五つの部の各章が年代を追いつながりながら独立した学校史として書かれており、しかも網羅的に取り扱われているので、多少の重複があるのも止むをえないかもしれない。また一面『百年史』は幼稚園から大学に至るまで、男子校も女子校も共学の学園もすべてを包括して書かれているので、時には記述が簡略にすぎる感じがしないでもない。もう一つは『通史編』に取り扱われた人物について言えば、同志社関係の教職員に重点が置かれていて、これに較べて同志社が輩出した各界の校友、同窓については余り語られていないように思われる。筆者は『明治学院百年史』を読んで、学院で学窓生活を送った校友、それから中途退学者であっても出色の人物は学園史に取りあげている『学院史』

の出身者の取り扱い方に、多大の感興を覚えたことがある。

とにかく、『百年史』は五部の各巻首に序章があり、これを読んで任意の章を読めば大いに読書の援けになる。さらに二つの索引、人名索引と事項索引とを活用すればよい。

同志社創設期約十五年の歩みを書いた第一部の第一章「ラットランドにおける新島襄」は、これまでのように彼自身の書いたものではなく、当時の土地の新聞紙の記事に基づいて語られる。まず百年余りも後に発見された新資料に驚く。「新島襄の教育理念」の章では、青年新島が吉田賢輔、杉田廉卿らとキリスト教へ接近したという津田仙の信仰経歴談を引用しているのは注目すべきである。しかし、新島の精神革命を引き起した書物の一つとして、新島は横山由清の『魯敏遜漂流行紀略』と黒田麴廬の『漂流紀事』のどちらを読んだかは判明しないとしているが、この記述は検討の必要がある。

この二種のロビンソン漂流記の和訳のうち、国学者横山由清訳は安政四年に刊行された略本で、オランダ文百科辞典によった梗概に過ぎないが、蘭学者黒田麴廬訳は嘉永初年頃の翻訳と考えられている。黒田訳『漂流紀事』は写本で伝わり、京都大学図書館所蔵本は三巻六冊からなり、各冊の奥書には「安中侯板倉氏蔵本借写」と記されている。この原写本は安中板倉勝明の藩邸の文庫に秘蔵されたものであり、新島襄はこの板倉藩邸にあった黒田麴廬訳『漂流紀事』を読んで感銘を覚えたことであろうと推定したことがある(拙著『日本近世英学史』)。

なお、新島の教育上の業績としては、岩倉使節団田中不二麿に随行して編纂した教育制度調査書である『理事功程』をも取りあげる

べきであろう。新島の英文ロンドン日記によると、新島はイギリスの教育制度調査のため視学官マシユ・アーノルドと二度会っているが、新島はアーノルドに会った最初の日本人であるかどうか。少なくともアーノルドに会った初期の日本人であったと考えられる。

この創業期には、仙台・東華学校があった。新島襄が名儀上の校長であったためか、これまでは同志社の正史には取り扱われなかったが、はじめてこの『百年史』に登場して、その創設と廃校との事情が述べられている。そこに学んだ山梨勝之進(後の海軍大将)は、後年同志社を訪れて構内を歩きながら、東華学校の本校をはじめ訪れたという喜びを語ったという。

第二部に移ると、キリスト教育の受難の明治後半の二十余年の歩みが語られている。「キリスト教社会主義と社会事業」の章では、社会運動家松岡荒村、山川均、大石誠之助らの中途退学者が記述されている。山川均は戦前の同志社では黙殺されていた人物であったが、戦後になってから同志社を訪れて講演をした。大石誠之助については、『大石誠之助——大逆事件の犠牲者』の著者から大石の同志社時代の資料を求められた時、在学当時の記録は見当たらず、『同志社ローマンス』に収められた岡本良太郎の断片的な談話を報告するに止まったが、『百年史』においても大石の同志社資料は記されていない。

従来の社史では、同志社教育に尽した外国人宣教師は、僅に創業時代のデイヴィス、ラーネッドなど少数の人たちに限られていた。ところが、この『百年史』では、各部に「同志社の宣教師たち」の章を設けて、明治期から大正期を経て昭和期に至るまでの宣教師の

生涯が記述されている。一九六〇年日米修好通商百年記念行事運営委員会では、日米修好に功績を残したアメリカ人を表彰したが、このとき同志社関係の宣教師は宗教、教育の分野では十二名、社会、文化の分野で二名が表彰された。明治期ではデイヴィス、ラーネッド、ゴードン、D・C・グリーン、J・H・デフォレスト、オーティス、フランク・ケリー父子たち、女性ではゴードン夫人、デントン、タルカット、大正期ではS・ギュリック、ロンバードが名をつらねた。社会、文化の分野ではベリーとジレットがいた。

第三部は明治末期から大正期を経て、昭和初期におよび約二十年間の同志社の歩みである。「大正デモクラシーと同志社」の章は、学問的には吉野作造、宗教的には海老名弾正の影響をうけた有能な弟子たちが同志社の教授陣に続々と加わった華やかな時代を語る。

一九三〇年代後半のいちじるしいキリスト教迫害の時代を経て、第四部の戦時下の同志社については、時には執筆者が自らの体験を如実に語っていて、人の心をうつ迫力を感じる。最後の第五部は戦後の同志社三十年の歩みであり、生々しい現代史である。

この『百年史』には「通史編」について二〇〇頁を越える「資料編」が含まれているという。資料といえは、詳しくは統刊される正史にはじめての試みである「資料編」をみるべきであろうが、四つの部の各章に引用されている資料の数々をみて、その収集と整理につとめた社史料編集所の協力が少なくなかったことが感じられる。

金蘭短期大学教授
京都市立芸術大学名誉教授
昭和四年大学英文科卒業

同志社研究の将来

同志社研究と言ってもその範囲は広く、それは過去、現在、未来にまで及び、理想的、理念的には同志社の全教職員、学生、校友がその研究の主体であり、また客体であらねばならない。またどの学園にも敷地設備というべきものがあるから、それが百パーセント利用されたか、また利用されているかという問題もあろう。さらに将来への展望としてどの程度までの拡張発展が必須であり、必要であるかという見通しが重要である。量的発展か質的改善かという二者択一は何時の時代にも学内外の問題となり、いわゆる学園騒動の原因ともなっている。ただ漠然と時流に身を委ねて時間に解決の道を求めることも一方策であるが、創立百年を既に経過した同志社にとって、全学的協議の下に長期的展望に立ち、移り変わる時流に、「ノアの箱船」を操縦するに足る「船長学」「人工頭脳学」(Cybernetics)も要請されていることと思われる。

そのためには、まず同志社百年史の検討が必要であり、それを出

高 橋 虔

発点とせねばならない。幸いにして今回同志社百年史が委員諸氏のなみなみならぬ努力によって通史編、資料編の構成の下に完成を見るに至ったことは、同志社研究の将来に対して一大光明を与えることになり、御同慶の至りである。これが単にもう一つの書物が出版されたということに止まらず、その検討や批判が続々と行なわれて、学園の将来の積極策が生み出されるようにと願う次第である。筆者はこの百年史の通史編をゲラ刷によって通読しただけであるが、それは五部、一五九〇ページに及び、読むだけでも数日を要する規模である(資料編は未読)。第一部は創業と成育と題して、ラットランドの教会における新島先生の募金アッピールのことから始まり、同志社英学校の開設、先生の逝去の時にまで及んでいる。この部分は言わば新島裏伝であって、新資料なども活用され、従来の諸種の新島伝と比較して新味を加えている。第二部はキリスト教教育の受難と題して、新島なき後の受難期の同志社が直面した諸問題を

詳述し、明治時代の終わりに至っている。第三部は大学への道と題して、大略大正時代の同志社の歴史を述べ、原田総長の時代から海老名総長時代に及んでいる。第四部は戦時下の学府と題して昭和前期における日中事変の時から太平洋戦争終結の時に至る多事多難の時代、第五部は再生と発展と題して戦後から創立百年の記念の年に至るまでのさまざまな事件を取扱っている。

今回の同志社百年史は、以前の同志社五十年史、同志社九十年小史と比較すると、前後一貫した通史となっているから、全般的にバランスがとれ、また歴史的叙述の配慮が行なわれているから、事実と事実としてそのまま客観的に捕捉されている。時には事実判断とともに価値判断も下されているが、それはむしろ将来の同志社を思っただけのことと察せられる。最後の締めくくりの語として次の要請が述べられている。「ただ、ここでぜひ強調し、かつ期待を表明しておきたいことは、全同志社人が、同志社百年の歴史を見据え、現況と照らし合わせながらそれぞれ課題を探り当て、その解決の方途をまざぐっていただきたい、ということである。問題は一同志社に限られる事柄のみではない。わが国の教育機関が共通にかかえている問題もあれば、私立学校に固有の問題も少なくないであろう。

解決のために必要かつ有効であれば、他の私学およびキリスト教学校教育同盟その他あらゆる教育機関とも、より一層提携をよくして当たらねばなるまい」。同志社百年史が多くの討論や実践を本論とする一つの総論また序説となれば、この大冊の出版もその意義と光輝とを発揮することであろう。

人間が残した過去の営為は無限に存在するから、同志社百年史に

出沒する人物や事件についても、どれを選択、採用するかということとは、その歴史を書く人々の主観に委ねられている。そのため専門の歴史家は主観を最少に留めるため客観的資料により、それを駆使するのである。今回の百年史も通史とともに資料が公開されたことは学問的には当然のことであるが、従来の同志社史には余り例がなかったことである。ただし、資料が単に公式文書だけに制限されるとそれは一方的、表面的なものになり、私信、日記のような非公公式のものも採用されねばならない。しかしそれにも限度があり、公式非公公式を問わず、それらの諸文書の紙背に明哲なる眼光を徹するよう努力せねばならない。いわゆる深層心理学的な検索を必要とするゆえである。このような面についても今回の百年史中に垣間見られ、心強いことである。右にも述べたように、歴史的事件や人物の撰択、それらの価値評価は至難の業であり、時代の進展によって当然変化して行くものであるが、それらの点においてもさらに厳正であるべきことは言うまでもない。

この百年史が与える示唆に基づき、同志社研究、また新島研究について思いつくままに少し述べて見たい。教育事業は一国の繁栄のためだけではなく、人類文化のためにも必要欠くべからざるものであるが、それは国内また国外の政治上の変遷に直接影響されることは、同志社百年史を見ても明らかなことである。苛烈な戦時情勢の下には学の独立もなく、まして大学の自治などはいとも安易に踏みこじられてしまうのである。この意味において大学は国家のあるべき姿、世界平和についての見識や具体策を公表し、それを堅持する用意がなければならない。この点において元学長田畑忍博士が年来

唱道されている永世中立の理念が国際法的にも、宗教的、倫理的要素としてもさらに同志社人によって強調される必要がある。一九八〇年代は政治的不安、混迷の時代と言われているが、もしそうであればなおさら永久平和、世界国家への道が同志社人によって追求されねばならない。

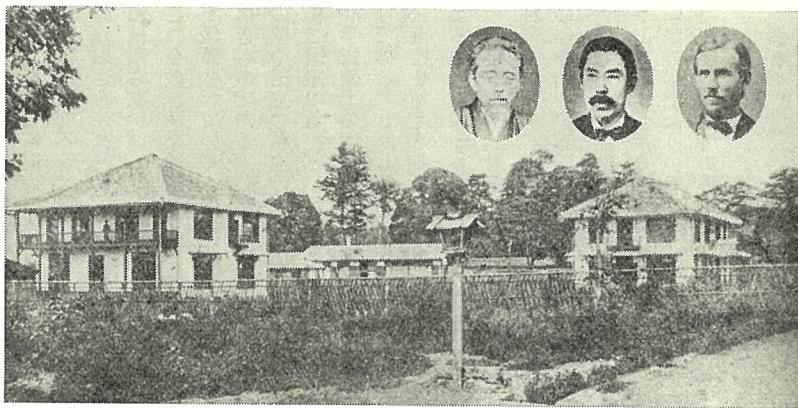
これを教育活動に限って言えば、教育を受ける権利はもとも憲法で保障されている人権の一つであるから、それは無償で行使されるべきものである。しかるに現実の国家においては入試や高額の学費の壁や国立、私立の格差のために有名無実となっている。大学教育まで国庫の負担とし、大学院教育だけを個人の負担とすれば、入試や学費値上の問題も一挙にして解消するが、現在ではそれは夢物語りである。しかし八〇年代においては、各種の専門学校や現在二千三百校を超える各種の専修学校が急速に発展し、コンピュータによる教育 Computer Assisted Instruction も導入されるであろうから、学部編成も筑波大学なみに学際的になり、學術修士や博士の称号を持つ者の数も増加することは確実である。画一的な教育はその影を消し、真に学問に打込む気力と能力のある者が大学に残ることになる。(戦前にはいわゆる官費で就学できるものは師範学校と軍関係の教育機関に限られていた)。米国の大学(カレッジ)は四年制の学芸(リベラル・アーツ)大学であって、その卒業生が神学、法学、医学等の専門課程に三年以上就学するのである。新制大学が米国のそれに準拠したというならそこまで到達しなければ無意味である。

同志社の各学校はその百年史の過程において、経済的に独立採算

の方向に向ったことは、必要でもあり、且つ賢明なことであった。しかしその片面同志社の連帯意識が希薄になったことは否定できない。そのため各学校の間の人事交流や協力にまで及びが入り、いわゆる一貫教育の実も十分に挙げられないことは今後の問題となるであろう。教職員を同志社出身者だけに限ったり、教職員や校友の子弟、スポーツ選手の入学に優先権を与えたり、下級校の卒業生を全部上級校に無試験で入れることは同時に弊害も伴うことが予想される。しかし、一日、二日の入試を厳正に行なって機械的に得点の多い者から入学を許可しても、その成績のよい者の大部分が他校へ移って行くような結果になれば、何のための入試かわからないことになってしまふ。入試の改善と同志社の一貫教育の問題は差し迫った緊急課題と言うべきであろう。これには相当の改革と決断とが必要である。医学部、理学部増設のことも同様である。

最後に新島研究のことについて一言するにしたい。新島研究については相当の資料がすでに多く蓄積されており、中にはまだその解明を待っているものもある。同志社創立百年を期して新島全集の企画が故秦理事長その他の人々によって着手されていたが、秦氏の急逝のため一時休止の状態になっていることは残念なことである。しかし同志社百年史の発行によって新しく新島全集への道が開かれたように思われ、希望を与えられた次第である。新島研究は将来の同志社におけるキリスト教教育のあり方に多くの示唆を与えることを認識して、そのための研究と考えることもできる。新島先生の精神はその直系の弟子たちに伝えられ、彼らを通してそれが再解釈され、実践されたことをも考え合わせ、それらの先輩たちの研究にも及びたいものである。

(大学神学部名誉教授)



相国寺門前へ移転直後の同志社 右第一寮、左第二寮（中央 新島襄、左 山本覚馬、右 J.D.ディヴィス）

刊行された

『同志社百年史』（全四巻）

一九七七年度から三カ年計画で編纂をすすめてきた『同志社百年史』通史編二巻、資料編二巻がこのほどようやく完成した。

「通史編」

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育（明治前半期）

第二部 キリスト教教育の受難（明治後半期）

第三部 大学への道（大正期）

第四部 戦時下の学府（昭和前半期）

第五部 再生と発展（昭和後半期）

上野直藏総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡亂な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学

校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」

「通史編」は主として、社史史料編集所に保存されている同志社創業以来の諸記録など各種文書にもとづいて、実証的に叙述された。「資料編」は、叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。原資料による同志社百年史といつてよいものであり、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円。

送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

年表を含む。三月中旬刊、頒価未定。

発行・学校法人同志社

取扱い・同志社収益事業課

（電話〇七五―二五一―三〇三八）